

## 「患者-医療者間のギャップ」

埼玉医科大学総合医療センタープレストケア科 矢形 寛

私が医師を目指したきっかけは、もともとサイエンスが好きだったことと、人体の神秘に興味があったからです。ですから、どちらかというと研究者のような将来イメージで医学部に入ったのでした。その後、医学を学んでいくうちに、やはり臨床をやりたい、がん治療に関わりたい、直接その目で確かめたいと思うようになり、卒後は外科を選択しました。医師になってからはひたすら先輩から仕事を教わり、とにかく教わったことをすぐ実践できるように訓練を積んできました。ある日内科医と胃がんの治療についての話をしていました。私は手術法について説明をしたところ、その内科医が「何故手術をするの?」と質問してきて驚きました。外科医としてはまず手術ありきで、手術をしないのは手術ができないからという理由だけでしたので、答えがすぐに出てきませんでした。そうこうしているうちにEBM(evidence-based medicine, 科学的根拠に基づく医療)という概念が登場し、カルチャーショックを受けました。自分たちの医療が如何に経験や慣習などに依存した曖昧なものであったかということに気がされたからです。適切な知識と技術を確立するための適切な方法論が重要であったのです。それからはEBMを最も大きな柱にして、自分の医療知識/技術を一から考え直してきました。ところでEBMは単なるエビデンスの実践と誤解している医療者が未だいることです。EBMでは実は「患者の嗜好、人生観」を最も大切にしています。患者の思いがあって初めてEBMが意味をなすのです。ところがエビデンスだけで医療を行おうとすると、それを受け入れない患者さんが出てきます。そのときエビデンスを実践しようとする医療者は説得しようしますが、かえって溝が深まっていくことがあります。ここに2019年がん哲学外来市民学会のテーマとした「患者-医療者間のギャップ」が生まれます。もちろんギャップの原因は他にもいろいろあります。これらのギャップを埋めよりよい医療が実践されるためにどうしたらよいか、是非とも学会で一緒に考えてみませんか。



ホームページ <https://saitama-med.wixsite.com/gantetsu2019>

編集後記:今回は医師である矢形寛さんに投稿していただきました。  
 メディカルカフェのみならず、市民学会も全国各地で行われ、がん哲学外来がより広がっていることを感じています。  
 物事を成し遂げていくとき、様々なギャップが生まれます。  
 そのギャップこそが、よりよくするための大切な鍵となるのではないのでしょうか。

編集:青柳志保 制作:山田真子  
 Eメール: shihoabamakoto@gmail.com

目白がん哲学外来カフェ 森尚子  
 Eメール: mejirogtcafe@yahoo.co.jp  
 シャチホコ記念がん哲学外来メディカルカフェ 彦田かな子  
 Eメール: shachihokokinen@yahoo.co.jp